

主日の福音 2025/10/26(No.1380)

年間第 30 主日 (ルカ 18:9-14)

私たちが欠けていることを謙虚に認めて祈る



今年、長崎教区は司祭の黙想会を三つのグループに分けて開いています。理由はカトリックセンターの閉鎖です。カトリックセンターが数十人受け入れできたので、大司教館の宿泊受け入れと合わせて、まとめて黙想会ができていたのですが、出来なくなりました。そこで会場と日程と説教師を三通り設け、黙想会を受けさせています。

私は大司教館での班に参加してきました。説教師は長崎の愛宕教会を任されているレデンプトール会の瀬戸神父様でした。修道会の神父様でしたので、レデンプトール会を立ち上げた聖アルフォンソからの学びがほとんどでしたが、その中に長崎教区司祭が日頃足りていない部分を見つけることができて、とても学び多い黙想会でした。

司祭の黙想会の中でももちろんミサがあります。オルガンを弾いてくれたシスター以外は、全員司教と司祭です。私はその中で、二日目のミサの主司式を依頼され、引き受けました。福音の朗読箇所は、「あなたがたも用意していなさい。人の子は思いがけない時に来るからである」という部分を含んでいました。

黙想会中であっても、赴任先の教会の信徒が亡くなることがあります。だから「『人の子』と、『お葬式』は思いがけない時に来ます」と前置きして、全司祭と司教様に問いかけました。「亡くなった方の遺族、また葬儀社から亡くなった方の霊名、洗礼を受けた教会、洗礼日が分からないと電話が来たらどうしますか？」

「下五島地区の答えはこうです。下五島地区は半数の教会が、スマホ調べて返事ができます。黙想会を受けながら指示を出せるので、慌てて戻って黙想会の残りの貴重なお話を無駄にせず、ギリギリまで黙想会に参加できます。皆さんの地区はどうですか？」葬儀が入ったと言い残してさっさと帰り、残りの黙想をすべてキャンセルする神父様がいます。致し方ないのかもしれませんが、それって、黙想になってますか？説教の最後には、一日も早く、教区全体が下五島地区のようになれるよう、帰ったら何をすべきか考えてくださいと付け加えました。

さて福音朗読ですが、ファリサイ派の人と徴税人が神殿で祈りをささげました。神様に私たちが祈る時、それはほとんどが「願いの祈り」だと思います。日々を感謝する祈り、自分のことは横に置いて純粋に神様を賛美する、礼拝する祈り。こういった祈りもありますが、多くは、願い事の祈りだと思います。

そんな中で、ファリサイ派の人の祈りはどうだったのでしょうか。ファリサイ派の人の祈りはちょっと鼻につきますが、基本的には「感謝の祈り」だったのだと思います。ですからいちおう、祈りと言えるものでした。与えられた身分や環境の中で自分が出来ていることを感謝していたからです。しかし、ファリサイ派の人の祈りは、私たちだけでなく、きっと神様にとっても鼻につく祈りだったのではないのでしょうか。

一方で、徴税人の祈りは私たちがよく唱える「願いの祈り」でした。「神様、罪人のわたしを憐れんでください。」（18・13）徴税人の祈りは受け入れられ、義とされて帰っていききました。感謝の祈りがダメで、願いの祈りが良い。そう言いたいではありません。皆さんも何となく分かっているでしょう。感謝の祈りと称して、自分は完璧だと言っていることが問題なのです。

徴税人は、自分に欠けているところがおおいにあるので、憐れみを願い求めました。人間だからどこかが欠けているはずなのに、自分には欠けたところが無いと思い込んで感謝するファリサイ派の人は、感謝している風で、感謝していなかったのではないのでしょうか。

どんな人にも欠けているところがあります。周りから完璧だと思われる人でも、神様にさんざん不平不満を言いたくなるような不幸な境遇に置かれている人にも、欠けているところがあるのです。その欠けているところに気づき、認め、赦しを願ったり憐れみを乞う。欠けているにも関わらず、働かせてもらっていると感謝する。すべてに、欠けていることを謙虚に認めることがあって、祈りは成り立っているのです。

中田神父には、「私はあの人よりはマシな神父だ」と思っている節があります。するとファリサイ派の人と同類ですから、祈りをしても神様に受け入れて貰えません。「あの人より数倍働いている」とすら考えています。そんな、兄弟司祭を見下す私の奢り高ぶりを、毎年黙想会で反省して帰ってきます。「私には欠けたところがある。」私の欠けたところを学んで帰るのが、中田神父にとっての黙想会なのだと思います。

私たちの祈りは、欠けたところを認めた上での祈りでしょうか。感謝、賛美、礼拝、願い。どの種類の祈りであっても、私の祈りの底辺を流れているのが、「欠けたところ」という謙虚さでありたいものです。特に願いの祈りを唱えた後に、「私の祈りはかなえて貰えなかった」と嘆く人がいますが、そこに何かが欠けているのではないのでしょうか。

神は必ず、欠けていることを認める人の願いに耳を傾け、欠けているところを恵みで満たしてくださる方です。徴税人は、自分が欠けていることは自覚していましたが、「あーこれで私の祈りは叶えられた」と満足して帰ったのでしょうか。祈ったけれども、私の祈りは叶えて貰えるはずが無い。そう思って帰ったのではないのでしょうか。欠けているところが大きすぎるので、期待すらしていません。それなのに、欠けたところがどんなに大きくても、神の恵みは十分すぎるほど深く広いのです。

「金継ぎ」という技法があります。割れた陶磁器、欠けた陶磁器を漆で接着し、継ぎ目に金粉を施して美しく仕上げる日本の伝統技法です。「割れたもの、欠けたもの」を「割れていないもの以上の価値に引き上げる技法」と言ってもよいでしょう。神は人祖アダムとエワが罪を犯した時、救い主イエス・キリストを遣わす計画を立て、人間を、罪を犯した時以上に価値あるものにしてくださったのです。「欠けていることを謙虚に認める」とは、私たちが義とされるための「窓」なのです。

死者の日(ヨハネ 6:37-40)